

入江建久先生を偲ぶ

2022年10月に室内環境学会創設会員であり、名誉会員の入江建久先生がお亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りするとともに、先生が室内環境学会への貢献、室内空気質の研究、そして後進の指導に果たされたご貢献に心より感謝いたします。

先生の名前に“建”が入っているのは1934年の建国記念日に東京で生まれたゆえであると先生からお聞きしております。先生は東京大学工学部を卒業された後、建設省、東京大学、国立公衆衛生院（現・国立保健医療科学院）建築衛生学部長、信州大学教育学部教授、新潟医療福祉大学医療技術学部教授を歴任されました。

先生に初めてお会いしたのは1989年でした。当時白金台にある国立公衆衛生院4階にある部長室をお尋ねし、先生のところで勉強したいと申し上げたところ、快く受け入れていただきました。その後、専攻課程と専門課程（Master Course）の学生として貴重な勉強の機会を得ました。当時先生の主な研究課題は“落下塵”でした。その関係で、毎日6階にある研究室で光学顕微鏡を用いて落下塵をカウントすることになりました。地味な研究ではありますが、実際の粉塵をたくさん見たことは後の研究に大変役に立ちました。国立公衆衛生院の建物は米国のロックフェラー財団の寄付で建てられたものであり、和光市への移転後に壊されることになっていました。この歴史的な建物を保存すべく、先生たちの活動で現在港区立郷土歴史館として活用されています。

先生は敬虔なクリスチャンで、毎週日曜日に本郷にある教会で活動していました。また、毎週6階の入江研で聖書勉強会を開催されていました。メンバーには小林陽太郎先生などがおられました。先生は将棋が強い人で、ほぼ毎週土曜日の午後に研究室を出て本郷にある将棋倶楽部に向かっていました。

一生忘れられない思い出があります。公衆衛生院専攻課程に進学する前に、日本建築学会大会の発表論文を書くことになりました。当時は一太郎の文書、Lotusの図を出力したのち、所定の用紙に貼り付ける方法でした。先生が東京大学教養学部で製図を教えられた関係で、貼り付けは大変たくみでした。現在はオンライン投稿ですが、当時は“4月1日当日消印有効”の郵送でした。先生の論文添削は大変丁寧であり、締め切り日に何回も直されました。その結果4月1日の深夜に切り貼りの残骸を研究室に残したままで先生と一緒に建築衛生学部長住宅衛生室長の松本恭治先生の車で東京郵便局に向かいました。11:56分に封筒に印が押され、ギリギリ間に合いました。それを“教訓”に現在自分の学生に早めに提出するように求めています。

先生は国立公衆衛生院の時代から建築環境工学、住教育学に携われ、「健康に住まう知恵」など多くの著作が発表されました。先生には1992年に信州大学に移られてからも大変お世話になりました。1993年に公衆衛生院研究課程（Doctor Course）入試の第2外国語はドイツ語でした。学会の出張先などで親切にドイツ語の発音や文法を教えてくださいました。公衆衛生院の時代から国内学会、海外学会はいつも先生と行動を共にしておりました。1993年フィンランドのヘルシンキで開催されたIndoor Air 1993も一緒に参加しました。参加後にスウェーデンに向かい、サンドバグ先生がおられる国立研究所を尋ねたことは未だに鮮明に覚えております。筆者が工学院大学に移ってからも、先生は身辺整理で自ら整理した専門書をわざわざ新宿まで届けに来ていただいたことを未だに恐縮しております。

入江先生のこれまでのお導きに心より感謝し、安らかに永遠の眠りにつかれる事をお祈りいたします。

柳 宇